
OSANANAZIMI

伊崎瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OSANANAZIMI

【Nコード】

N2885R

【作者名】

伊崎瞬

【あらすじ】

高校2年の敦志と優は幼いころから幼馴染だった。そんな2人の周りで起こる幼馴染ならではの問題！

紹介

・上野敦志 うえのあつし あだ名 あつ 高校2年 この2人は幼稚園のころからの幼馴染で

・清水優 しみずゆう あだ名 ゆう 高校2年 家は学校から遠く、電車通学。2人の家近し。

・黒木恋 くろぎれん あだ名 れん 高校2年 上の2人と家が近い。
敦志に気がある。

敦志と優とは中学校からの親友。

・上野宏 うえのひろし 敦志の父親。大きい規模の会社の上から2番目。

・清水由紀子 しみずゆきこ 優の母親。看護師。

・清水和志 しみずかずし 優の父親。敦志の父と仲がよい。外科医。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

幼馴染というのはいいこともあれば悪いこともある。
まあ勘違いされることがほとんどなのだが。

まずは、各家庭の状況を説明しておこう。
まず、敦志の家のこと。

敦の母は2年前に起こった交通事故で他界。
父は家に帰ってくるのは日付が変わってから。
なので家にはいつも敦志が一人。

優の家について。

優の家も敦志の家と同様に、両親が医療関係の仕事をしているため、帰ってくるのは遅い。

全く敦志の暮らしぶりと変わらない。

お互い、子供がかわいそうということで「仲良し同盟」を結んでいる。

いつでも、どちらかが泊りに来てもいいことになっている。

2人とも料理はかなりの腕前だ。

しかし、お昼ご飯は敦志の分も優が作る。

そして黒木恋について。

恋は敦志と優の中学時代からの親友。

幼馴染までとは行かない。

- - -
- - -
- - -

僕はいつものように目が覚めた。

午前6時30分だ。毎日同じ電子音で起きる。

思い体をゆっくりと起こし、ベッドの横にあるカーテンを開けた。

バシャッ！！ガラガラガラ……

朝日が入ってきた。一気に充電されていく。

朝の充電が完了し、朝食を作るためにリビングに向うためにドアを開けた。

すると下の階からリズムカルな音が聞こえてきた。

コンコンコン…ジュー…

なぜだ？、と思ったがすぐに答えは分かった。
今日は優が泊っていた。だから気を利かせて朝食を作ってくれたの
だろうか。

「おはよう。やつぱり優か…一瞬誰かと思ったし。」

「それは失礼な話ね。まっ、とにかく顔を洗ってくれば？シャキッ
！とするよ。」

「ああ。」

そういつて洗面所に行き水を思いっきり出して顔を洗った。少し寝
癖も整えつつ…

リビングに入ったらもう優が座っていた。

僕も急いで優と向き合う形で座った。

「「いただきま〜す。」」

もう、こんな毎日が15年弱続いている。

そして、朝食を食べたらリビングで着替えた。もちろん優も。
このくらいになると優の裸なんてどうでもよくなってくる。

もう、お互いにそういう関係になってしまっている。

だって学校で「新婚さん」と呼ばれるぐらい。

玄関の鍵を閉めて駅まで歩き出した。

「優って好きな人とかいないわけ？」

「う…うん。そう言われてみれば。」

「そうなんだ。なんか優って以外だった。」

「失礼ね！！」

冗談を言いながら駅まで歩いていった。

朝　学校（昼休み）

僕は家を出て駅に向かった。
駅までは10分もかからない。

現在7時ちょうどである。

電車が出るまであと10分ほどあったがもう、ホームに行っておく
事にした。

そして電車が来る2分前に

「あつゝゝゝ、優ゝゝゝゝ、おはよゝゝゝ」改札から走ってくる
一人の少女の姿が見えた。
黒木恋だった。

「あつ、恋！おはよゝゝゝ」優もすぐに返事を返す。
だが僕は何も言わなかった。

すると恋が僕のそこまでよってきて

「おはようは？敦志君。あれ、おはようっていえないのかな？」や
たらと顔が近い。

「あつ、恋ちゃん。おはよう」わざと「ちゃん」をつける。

「よし、お利口やね。」

恋は学年で1、2を争うほどの美少女だった。

そのもう一人の美少女はじつは優だった。

恋と優は目が大きくしかも二重。

優は髪の毛はショートなのに対し、恋は2つ結び。そんなに長くな
い。

僕と優は身長が165なのに対し、恋は160。
少し小柄。

電車で学校の最寄り駅までは30分で着く。

その間は恋、俺、優の順番で座る。
最近では恋愛についての話をよくする。
誰と誰が付き合ってるのかそういう他愛もない話ばかり。
みんなで情報交換の時間だ。

駅からは徒歩5分で学校に着く。
俺と優は1組。恋は3組。

ガラガラガラ……

「おはよ〜」優が叫んだ。

「あつ、おはよう。優う、今日も相変わらずLOVE LOVEやね。」

「はあ？私があつと？そんな分けないでしょ？こんな意気地なしの男と付き合えないって。」

「おい、優。今の聞き捨てにならないなあ」

「本当のこと言って何が悪いの？」

「そういう問題じゃねえだろって……ってかお弁当」

「ああ、はい。多分今日はあつの嫌いなものは抜いてるからね」

「いつもありがとな」

礼を言っただけに座り、机の中に教材を入れるまでクラスのみんなに

「ヒューヒュー」「さっすが新婚やね」

と茶化されていた。

まあ、もう、こんなにも慣れたも同然。

その日の昼休みのこと。

俺が次の授業で使う教材を出していたときのこと。

「ちよつとあつ！あんたどういふつもり！！！！？」「すごい怒りの雰囲気を出しながら俺の前に来た。」

「な、なんだよいきなり？」

「ちよつとついてきて。」「といって優は教室も出て行ったので慌て

てあとを追いかけた。
みんなの視線が痛い。

昼休み

「ちょっと！どついうことよ！」

屋上にきての、第一声がこれだった。さっき教室でなんだか分からないけど怒られて、ついて来いといわれ

て、ついてきたら屋上に来た。そして怒られた。

「……？」僕の頭の上にはとっても大きな「？」が浮かんでいただらう。

「えっ？なに？俺ってそんなに悪いことしたっけ？」

「単刀直入に聞くね。あんた恋^{れん}のこと好きなのか？」

どこからそんな情報が回ったのだろう。もちろんありえない。確かに恋とはお友達である。しかし、恋愛対象としてみるのは難しいかも。恋が僕に気があるのは知っていた。いろんな人から聞くからね。それ以上に僕は好きな人がいた。そう、今僕の目の前にいる人。その名も清水優。最初のころはもちろん幼馴染として接するのが当たり前だったけど、今は女の子として見るようになった。料理は上手いし、家事もできるし、ぶっちゃけ、弁当はめっちゃうまだし。おそらく優はまだ気づいていない。

「そのようなことはございません。」僕は言った。

「はあ？それは嘘でしょ？幼稚園のひかり先生に『嘘ついたらだめだよ』って習ったでしょ？」

「うん、習った。でも、嘘ついついてないし。」

「意味わかんない!」

「いや、意味が分からないのは優のほうだよ。何でいきなりそうやって怒るわけ?別に優が怒ることないでしょ?」

「……………」

「黙ってないで答えたらどうだよ!」口調が強くなってしまった。優はまだ顔を上げてくれない。

「……………んだよ……………」ぼそつとつぶやくように言った。

「えっ?なに?聞こえない?」冗談ではなく本当に聞こえなかった。いきなり優が顔を上げた。そして僕の目の前まで迫ってきた。身長がほとんど同じなので相手の目の高さがあまり変わらない。でも、優の目はどこか少しばかり赤くなっていた。泣いてるのだろうか。

バシッ!

優がいきなり平手打ちをしてきた。

「ばかつ!」そういうと屋上へ通じる階段のドアを開けて校舎の中へと消えていった。

「おい、敦志大丈夫か?」声をかけてきたのは中学校のときから友

達の龍之介だった。

「ああ、なんとか。でもあいつ手加減を知らないな。」

「確かにね。」

そう言つて二人で校舎の中へと入つていった。長時間外にいたせいか、室内が少し緑色のような感じになつて、暗く見えている。階段を降り、教室がある階まで行つたら、目の前に恋がいた。

「あ、あつ！どこにいたの？探してたんだよ？」

「ああ、優に呼ばれて屋上に行つてた。でも、一人で帰られたけどな。」

そう言つてる間に龍之介は茶化すような目つきでこっちをみて口で「頑張れ！」といつてるのが分かった。どうやら龍之介は僕と恋が付き合つていると思つていろいろらしい。

「でも、さっき優なら保健室に行つたよ。ってか私が連れて行つたんだけどね。」

「へえ」

こつこつ時つて僕はどうするべきなのだろうか。迷う。

昼休み（恋目線）

「恋さあ〜ん」

私は名前を呼ばれた。読んでいた本にしおりを挟んで、先生の下へと駆け寄る。

「なんですか？」

「これ、職員室まで運ぶの手伝ってくれない？」指を指されたほうを見ると「今日の日記」という毎日全員提出する日記帳と「これで完璧！」という英語の問題集があった。さすがに女の先生一人では運べないね。

「了解しました。」

私は「今日の日記」を手に持って教室を出た。職員室は教室を出て廊下を右に曲がり、教室を一つ越えたら階段があつてその階段を1階まで下りる。（2年生は3階）そして外の渡り廊下を通じて管理棟に入り、左に曲がって事務室の隣が職員室になっている。結構長い道のりなのだ。

階段を下りているとき先生に声をかけられた。

「いつもいつも悪いわね。恋ちゃんばかりつかって。」

「いいえ、とんでもないです。私こういうの嫌いじゃないですよ。」

「ありがとう。助かるわ。」

短い会話を終わるころには階段を降りきっていた。それから職員室までは会話なし。

「失礼しまあゝす。」

一言声をかけてから入室する。しかも先生の机は職員室の一番端。普通教室の2つ分の職員室は大きいのでそこまでたどり着くのに――苦勞である。

「先生、ここ置いておきますね。」

「あ、ありがとう。助かったわ。」

私は一礼して先生の下を去った。そしてさっき出てきた入り口について「失礼しましたあゝ」といつて退出した。少し肩がこったなあ、と思いながら渡り廊下を歩いていると反対側の渡り廊下の3階に優の姿があつた。あの表情は何か悩んでいる表情だった。

私は急いでその渡り廊下まで行つた。すると優はさっきの姿勢のまま、ぼんやりと学校を眺めていた。

「わっ!」

「きゃっ!」

私が驚かしたら優は女の子らしい声で驚いた。

「そんなにビックリしないでいいじゃん。」

「だって恋がいきなり驚かすからでしょ？」

「まあね。で、どうかしたの？そんなくらい顔をして。」

「うつん。でも、恋には相談できないや。あつ、誤解しないでね。恋が頼りにならないとかそういうことじゃないから。本当に。でも、これだけはごめんね。」

「まつ、親友にも言えない悩みはあるよ。私も優に相談できない悩みがあるし……」

「そうなんだ……」

言葉を言い終わると優の体がふわりと後ろに倒れていった。私は地面に頭を打つ寸前で何とか体を支えることができた。

「ゆ、優！！しっかしして！優！！」

反応はなかった。でも、呼吸はしている。よっぽど嫌なことがあったのだろうか。私は優をおんぶして管理棟1階の保健室まで運んだ。階段を下つているときには誰ともすれ違いはしなかった。そして保健室に着いたらすぐにベッドに寝かせた。あとのことは保健室の先生に頼んでおこう。

「じゃ、あとはよろしくお願いします。」

「わざわざ運んでくれてありがとう。」50代半ばの女の先生がにっこりと笑って答えた。

そして私は何があったのだろうといろいろ推測しながら教室を目指していた。

階段を上りながら何回かつまづきながらも3階についた。

そしたらちょうど上から降りてきたところだろうか。敦志がいた。

「あ、あつ！どこにいたの？探してたんだよ？」

敦志の横には友達の龍之介がいた。私たちが話し始めたら幽霊のようどこかに消えていった。

「ああ、優に呼ばれて屋上に行ってた。でも、一人で帰られたけどな。」

なんか思いつめた表情をしている。優の悩みはこいつのことだったんだな。優が屋上に呼び出すことは告白して振られたのかな？ま、またゆっくり考えよう。

「でも、さっき優なら保健室に行ったよ。ってか私が連れて行ったんだけどね。」

一応優の状況を知らせてあげた。

「へえ」

敦志が返してきた返事はなんとも興味がないような感じの返事だった。こいつも何か悩んでるな。敦志は返事をしたら自分の教室へ歩き出した。なにか魂が抜けているような感じだった。

「大丈夫かねえ。」

敦志の後姿を見ているとなんとか笑いが出てきた。

眠り姫

「さようなら！」

今日も学校が終わった。でも、優の姿がなかった。屋上で別れたつきり。そのあとの午後の授業も出てなかったし。でも、帰りの会で先生が優は保健室で寝ているといていた。やっぱり心配だし、見に行くしよう。しかも今日は優の家に泊まることになってるし。一緒に帰らないとあとで何を言われるか分からないし。

「恋、優って保健室だったよね？」

「うん。そうだよ。」

「じゃ、また明日ね。」

「うん、明日。」

軽く挨拶をして恋とは別れた。保健室に行くついでに優のかばんと靴、自分の分のかばんと靴を持って保健室に行った。結構な距離があるわけだ。

「失礼します」

保健室の戸を開けると養護教諭の三浦先生がいた。

「あら、あなたは清水さんの幼馴染よね？確か名前は……」

「上野敦志です。」

「あつ、そうそう。上野君ね。黒木さんが言ってたのよね。」

「なんて言ってたんですか？」

「『多分放課後に上野君が来るから』って。」

「まあ、一応は心配ですからね。」

「あら、優しいのね。でも残念ながらまだ寝てるわよ。」

「起きるまで待ってます。」

「1時間ぐらい職員会議があるからここ、開けておくね。もし起きたらそのまま帰ってもいいわよ。」

「了解しました。」

僕の返事を聞くと先生は机の上にあった懷疑に必要な書類を持って保健室を出て行った。

この保健室にはベッドが3つあるのだが、そのうちの一つにカーテンが閉まっていたのでそこに優が寝てるとすぐに分かった。

音を立てないようにゆっくりとカーテンを開けてベッドの横にあつたいすに座った。

相変わらず、きれいな顔をしている。思わずほっぺたを突いてみたくなっただがさすがにやめた。

でも、なんで優はここに寝ているのだろうか。ただの仮病にしては結構長い時間眠っている。

そう考えてるうちにどんどん意識が遠くなっていっつのまにか眠りに落ちた。

「うう~~~~ん」

私は目が覚めた。すると真っ先に目に飛び込んできたのは白い天井だった。そのまま視線を右にずらしていくと病室のようなカーテンがあるのに気がついた。すぐにここが保健室だということが分かった。

とにかく今何時なのかが心配になり、体を起こそうとする。しかし、体が起き上がらない。自分の中でこれは金縛りなのかと思いながら布団の上を見てみた。

すると1本の腕があった。一瞬ホラー映画でも見ているのかと思っただ、すぐ横になにか丸いものがあったからそれをよく見てみると頭だった。

私はその頭の主を見てびっくりした。なんと私の好きな上野敦志だった。(あつ、言っちゃった…)

私は頭を思いっきり叩いた。力を込めると少し頭がジンジンした。すると敦志は変な音を上げながら頭を上げた。

「うう……」

「あつ、なにしてるのここで？」

「あつ、優起きたか。よかった心配したんだよ。」

えっ？あつが私のことなんかのこと心配したの？

「っていつかあつこそ何でここで寝てるわけ？」

「あれ？何でだったけな？何か考え事してたんだよ。そしたらウトウトって…あれ？何だったっけ？」

「それじゃただのバカじゃない。」

「優に言われたくない。…ん？優？…あつ優がなんでここにいますのかを考えてたんだ。なんか恋が運んでくれたみたいなんだけどな。」

あ、恋が運んでくれたのか。確かに私の記憶は恋とあったのが最後だ。確か渡り廊下で話してたんだよな。そしたら急に目の前が真っ暗になって…

「それがね、私にも曖昧なの。何でここにいますのか。」

「でも、無事でよかった。ん？お前顔真っ赤だよ？熱でもあるんじゃない？」

熱があるわけではなく、「無事でよかった」というあつの言葉に照れてるだけ。この鈍感野郎！！

「いや、ないから。」

そういうのだが、敦志は右手をすでに自分の額に当てている。まさか！これはまさか！そう思っていると案の定、左手が私の額をめがけて突進してくる。

あああああ、どうすればいいの？

ピタッ！

到着しました。敦志の左手が私の額に。この行動にキュンと来ない女子はいないはずがない。

「ちよ、ちよなにすんのよ!」

私は敦志の手を払いのけた。

「全然、熱くない。照れてるだけなのか？」

「そ、そう……んなわけないでしょ！」

「そ、そうか。」

鈍感バカあ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

これぐらい気づけよ！

「っていうか早く帰ろうぜ。今日お前ん家だからな。でも、料理は俺がしてやるよ。」

「ほ、本当ですか？敦志様？」

「まあ、今日は体調が悪くて寝たんだろっからな。それぐらいはやってやるよ。」

「ありがとう。」

私はベッドをきれいにして一応先生に置手紙をして保健室を出た。

靴を取りに行くのを面倒くさいと思っているとなんとそこには私のかばんと靴が！

敦志の優しさに改めて惚れてしまった優でした。

なぜ、恋が????

「ただいまあゝ」

「お邪魔しまゝす。」

僕は優の家に着いた。家に帰るまで何回も優は立ちくらみがしてフラフラして普通に歩けない状況だった。

そこでなんでかしないけど俺がおんぶ。でも、好きな人とこんなに近くなることもないしいいか、と思いながらなんとか優の家に着いた。おそらく優が片付けているのかな。家はきれいだった。

「じゃ、優は着替えておいで。あ、あとお風呂沸かしてくれたらうれしいな。」

「了解しました。」

そういうと僕は使い慣れた優の家の台所に立った。今夜は何にしようか。優の好きなオムライスにしよう。調味料はあるし、ケチャップもある。卵は……あつた！これで今夜のメニューは決定した。優の大好物のオムライスだ。

そしてチキンライスを作っているときに2階から降りてくる気配がした。

「あ、敦。ごめんね。作らせちゃって……」

「ああ。つてはあ！？な、なにしてんねん！」

馬鹿だ。優は本当に馬鹿だ。どこで買ったか知らないけど、ってい

うかそんなものどこにあったの？今の服装は……バスローブ姿！あほかマジで。しかも真っ白で、足が全部隠れているぐらいある。幸い、露出している部分は少ない。

「ゆ、優。どんな格好してるの？」

「見てのとおりよ。バスローブ。」

「お前毎日それか？」

「そうよ？いけない？」

「いや、いけないかって聞かれると返事に困るけど……でも、今日は男の子が来てるんだよ？さすがにもう少しましな格好してよ。つかまだお風呂入ってないでしょ？」

「うん、まだ。ねえ、敦、一緒に入る（ハート）？」

「いいよ。」

もちろん冗談。でも、こういう冗談は優に通じないのは知っている。あつ、また本気でとらえてるし……

「恋、いいんだって？」

「れ、恋？」

そうすると優と同じ格好の恋が出てきた。こいつ、恋まで道連れにしている……

「ほ、本当に？」

「うそです！」

「「えっ？うそ？」」

「そこでハモるな！っていうか2人で入ってこい。（♪お風呂が沸きました♪）ほら、ちょうど沸いた。あがってくればすぐご飯食べれるから。」

「わかった。恋いこ？」

「オーケー」

これで邪魔者はいなくなった。僕は料理に集中しよう。あっ！ご飯がこげた！！

作戦はおおむね成功した。敦志そうとう焦ってたわね。今日は敦志に対するドッキリをした。私と恋の2人で。まず、先に恋が私の部屋で待機しとく。そして敦志を私の家に連れてきてエロドッキリを仕掛けた。結果はさつきも言ったけどおおむね成功。でも、恋はそうとうあの格好恥ずかしかったみたいね。

そして今女2人はお風呂の中である。今思えば、恋の裸を見るのははじめてかも。結構いいスタイルしてるのね。残念ながら胸は私のほうが小さい（悲）

「恋って意外におっぱい大きいのね？」

「もう、優ってば！どこみてんのよ？」

「胸。」

「そういうことじゃなくて……」

「じゃ、なんなのよこの大きさは！」

私は耐え切れなくなって触ってしまった。おつ、柔らかい。

「もう！優ってば！変態！スケベ！エロ！痴漢！」

「恋、そこまで言ったら傷つくよ。」

「優こそ！」

まさか恋が触ってくるとはな。コンチクショー！私も仕返しだあ
――！

まあ、これから先はご想像できるだろう。もみ合った。

そうしてやく5分ぐらいは遊んでいただろうか？いきなりお風呂に取り付けてある内線がなった。

「ピピピッ…ピピピッ 胸を揉みあってないで早く上がれ。ご飯が冷えるだろ。」

「了解。今上がります。」

敦志の忠告のおかげで長く感じたお風呂の時間が終わった。

もちろん上がってもバスローブよんつ。

お風呂に入ったのはいいものの、あの2人がいないと結構静かなものだな。と思つた瞬間！

「もう！優ってば！変態！スケベ！エロ！痴漢！」

お風呂場からすごい叫び声が聞こえてきた。まあ、おそらく何をしたかは予想がつく。その言葉を境に今まで静かだったお風呂場から奇声が聞こえてきた。おそらく2人で揉みあっているのだろう。

そうこうしているうちにオムライスが出来上がった。今回は少し悪戯をしよう。ケチャップでの落書き。

まず、優のオムライスには「変態エロ女！」この6文字。

そして、恋のほうには「可愛いね！」この5文字を書いた。恋のはこれを見たときの反応がみたかったから書いてみた。

まだ終わりそうにないので内線で呼び出した。

「ピピピッ…ピピピッ胸揉みあつてないで早く上がれ。ご飯が冷えるだろう。」

するとおそらく優の声だろう「了解。今上がります」と返事が来た。

ご飯を並べて待っていると2人が相変わらずバスローブ姿できたからびっくりした。

ケッチャップモ文字をみて恋は顔を真っ赤にし、優は違う意味で真

っ
赤にしていた。

天国と地獄

「敦志くんっ……」

「敦志……！！」

上は恋、下は優。もちろん恋は照れているだけで、優は怒っている。何でかは理由がわかる。いやっ、僕がそうさせているのだから。

バスローブ姿の2人は立つたままダイニングテーブルの上においてある皿を凝視していた。

別に、皿が変わっているわけじゃない。中に入っているオムライスも変わって言うわけじゃない。しいていうなら……あの落書きだろうな。恋のオムライスには「可愛いね！」この5文字を書いた。

そして優のほうには「変態エロ女！」この6文字を書いた。

こうして書くとなるとおり、2人が照れたり、怒ったりしてる理由がわかったでしょ？

「敦志、これはどういうことなのかな？」

「あつ、い、いや、そ、その……ただの冗談でありまして……」

「これは冗談とはいわないわ。立派なイジメよっ！」

「ふうん。そう。じゃ、優の分、俺が食べる。こんなの食べたくないでしょ？」

「ああああああ、それはだめ。敦志だって私がオムライス大好き

なのは知ってるでしょ？」

「だから今夜はオムライスなんだけどね。」

「で、恋は何かたまってるの？」

その言葉で優から視線をはずし、恋の様子を見定める。相変わらず、顔を赤くしたまま固まっていた。

「あつ、ああ。なんなんだろう。このうれしい気持ちは……」

「れ、恋？大丈夫！？」

「うん。平気。でも、敦志くんにいわれるとなんだかとてもうれしい。」

「恋、誤解するような言い方はやめて。」本当に一瞬恋に惚れかけた自分が居ることの今頃気づいた。

「うん、ごめんね。」

「ま、早くてべないとさめちゃうから早く食べようよ。…じゃ、いただきます。」

「いただきます。」

そういつて僕たちは食べ始めた。

「優。もう少し女の子らしく食べようよ。せっかく可愛いのに……。」

「もうっ！そんなこといったら照れるに決まってるでしょ！でも、以後気をつけます。」

「はい、そうしてください。……恋、どうしたの？もしかして卵アレルギーとか？」

「い、いいえ。違いますよ。ただ、これは壊したくないのです。」

そういうとまた視線をお皿の中のオムライスに戻してしまう。そんなに依存することもないのに……

そして食事も終わりそうになったとき。

プルルル、プルルル。

恋の携帯がなった。

「もしもし？お母さん？……えっ？今から！そんな無茶言わないでよ！今日は泊まるっていったでしょ！？……はいはい。わかりました。じゃあね。」

そういうと恋は電話を切った。

「お母さん、なんだって？」

どうして人はすぐに電話での用件を気にしてしまうのだろうか。僕も幼い時から両親が電話を出た後には必ず、「なんだって？だれからあー？」と聞いていたのを思い出す。いまだにこの癖は治っていないようだ。

「お母さんが明日大阪に行くから今日のうちに準備していたほうが

いいんじゃない？って言われました。でも、断りましたがね。」

ええ、聞こえてましたよ。それと普段の恋と違った一面もね。……
心の中でそう思った。口には出さなかった。

「「「ごちそうさまでした」」」

僕たちはご飯を食べ終わった。そして食後の楽しみ(?)が待っていた。

「よし、我が家恒例のじゃんけん大会いくぞー！ー！」

そう、悪魔のじゃんけん大会。それは今日の前にある食器を全部洗う人を決めるじゃんけん。もちろん、負けた人で、勝負は1回のみだ。

「いくよお」。最初はグー、ジャンケンぽんっ！」

「「やったあー」」僕と恋は手を取り合って喜んだ。ジャンケンの結果、食器洗いは優に決まった。僕と恋はパーをだした。そして優だけグーだった。

「今、ずるしたでしょ！敦志、そういうことしたらいけないよね？」

「あのお……俺何にもやましいことはしてないよ。普通にじゃんけんしただけだし。」

「優、そんな屁理屈言ったらだめだよ。はやく洗ってきてよ。あつ、敦志くんはすこしだけ私に付き合ってね。(はあと)」

内心期待をしつつ、こくりと頭を下げた。

そんな様子を優が変な目で見てきたのでさっさと台所に優を押し込んだ。

今まで忘れていた。優が今日は保健室で寝ていたことを。でもあれだけ元気ならば大丈夫でしょう。自分の中でそう勝手に決め付けることにした。

「敦志くん。ちょっといいかな？」

「ああ。」

そう生返事を返すと、恋はさっさと2階に上がっていった。そして優の家の客間についた。客間といっても友達が来たときに泊まれるようにしてある部屋だ。今日恋は、ここに泊まるのだろうな。

期待半分、不安半分のままその部屋のドアノブを回した。

半拷問

恋に呼び出されてお部屋に行った。いつもの客間とは違う感じがした。

結構早めにきて部屋を整理したのだろうか。

部屋の中を静粛な空気が包む。

「あつ、さっきオムライスおいしかったよ。意外に料理上手なんだね。」

「あ、ありがとう。僕ってそんなに料理できることが意外かな？」

「うん……いわれて見ればそう見えるかもしれないけど……ケチャップの文字も上手だったし……。」

やっぱりその話が……でもそんなにこの話は長く続きそうにないな。

「結構部屋がきれいだね。いつもの優の客間じゃないみたい。」

「これがないと落ち着かないんだよね。」

「そうなんだ。でも、恋って家とかではこんなに静かなんだね。」

「いや、いつもはこんなんじゃないけど……なんか緊張してるのかな？」

「それは僕に聞いても分からないし……。」

そろそろ本題に入ってほしいな。

「あの……で、本題は？」

ヒュルッ……ストンッ……

えっ！！！

ちょ、ちょっと！！

バカかあ!!!!!!!!!!!!!!

「私の体みてどう思いますか？」

あほっ!!!!

いきなり目の前でバスローブを脱いだ。

そこには顔には似つかわしくない体つきをしていた。

優が触りたくなるのはたいてい大きな胸の人だ。で、さっき触って
たらしいから大きいということだろう。

「っていつかはやくバスローブを着てくださいよ……」

「いやですっ!」

「はあ?」

「私の体どうなんですか?あなたの好みの体ですか?もう少し胸が
大きいほうがいい?」

「いいから早く着なさいって。」

「うっ
……」

「ま、結論から言つとくといいいバディだと思うよ。」（棒読み）

「全然気持ちが悪くない……」

「そりゃそうだろ。っていつか何であんたたちはこんなことするの

「？」

「今日は優と約束したの。処女を奉げようって」

「ばか！……！お願いだからそういうことは言わないでくれ。せっかくなんだからもつとほかの事で楽しくしましようよ。ねっ？」

「うん。ごめんね。」

「じゃ、下に下りようか」

そういつて恋の手を引いてドアを開け階段を下りてリビングに入っ
た。

のどが渴いたので流し台の後ろにある冷蔵庫に飲み物を取りに行っ
た。

え……………

あ……………

うそ……………？

バカがいる……

「そんなに私に見とれないで（はあと）」

「ここはメイド喫茶じゃない。っていうかメイド喫茶でもそこまでしない。」

「いいじゃん（はあと）恋もそういうことをしたんでしょう？ 私もしていいでしょ？」

「ああ。もう俺帰るわ。ここにいられない……」

「ああ！まって！！」

「ハモるなばか！」

「ごめんなさい。」

「っていうか2人とも早くまともな服を着てくれませんか？3分いないに着替えてきて。じゃないと買える。」

「わかった、待っててよ！」

そついうと2人は2階に消えていった。

3分後……

「これでいい？」

「うん、いいよ。」

やっとまともなパジャマを着てくれた。でも、スケスケだな…
…やめてほしいわぁ…

なんとか落ち着かせることができた。

やっときた朝……朝は朝で大変だ……

朝の訪れを告げるニワトリの鳴き声……じゃなくて目覚しの音。そうか。今日は優の家に行ったんだった。

ふとそう思ったのはいつもと目覚しの音が違うからだ。これは音というより声だな。

優の可愛らしい(?)声が起こしてくれる。

ちなみに今朝の目覚めた声はというと「敦志く、起きないと遅刻しちゃうよ。足元に気をつけたほうがいいよ。ほら、足元に……わあ……」

という声で起きた。

ここにきても朝のルーティーンは変えない。カーテンを開けて充電する。今日は比較的目覚めがよかったほうなので充電はすぐに完了した。持ってきていた制服に着替え、階段を降り、リビングに入る。この前は僕の家で優がご飯を作っていたけど今日は作っていないみたいだ。

ということ僕が朝ごはんと優の分のお弁当を作る流れになった。久しぶりに弁当を作った。ここ最近ずっと優が作ってくれていたから。そう思って作っているとなんだか優がとても優しい女の子なんだと思い始めた。優が起きてきたら感謝の言葉ぐらいいいおうかな。

そう思いながら弁当を作ること30分。リビングのドアが開く音が聞こえた。

「あつ、おはよう。」

まだ眠いようでパジャマ姿で目ろこすりながら起きてきたのは優だった。

「よ、おはよう！ほら、久しぶりに弁当作ったんだ。」

「あ、本当だ。作ってくれたんだ。ありがとおね。ふわぁ〜〜〜！」
「いやいや、礼を言うのはこっちのほうだよ。最近毎日作ってくれてありがとうね。」

「もお、照れるでしょ……」

「っていうか早く着替えてこいよ。ついでに恋も起こしてきて。」

「はぁ〜い」

こういうところは可愛いよね。学校でももう少しおしとやかで品のある女性になってくれないかな。

そう思っていると恋も優も制服に着替えて起きてきた。僕は朝食を食べて僕だけ早めに優の家を出て学校に向かった。これといって事情はないのだけれど早めに学校に行った。

ガラガラ……おはよお……

やはり僕が1番だった。暮らすには誰もいない。一晚中窓を閉め切っていたのでなんか教室の中の空気がどんよりしているように感じる。さつさと自分の机に荷物を置いたら順番に窓を開けていく。窓を開けたら意外に涼しかったので窓のふちにすわった。足をばたばたさせる。すこし幼いころを思い出した。あのころは両親とも仲良くいっていた。今じゃ想像もできないほど。

正面から僕に風が当たる。まだ校門をくぐって学校内に入ってくる人はいない。グラウンドにも人影はない。先生たちは何人かは見かけたけど。

外を見ているうちにどんどん生徒たちが校門をくぐり校舎の中に入ってきた。

その様子をぼんやり見ていた。

ってやべっ！1時間目古文のテストだった……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2885r/>

OSANANAZIMI

2011年10月8日15時20分発行